



警告 のニュースレター「角笛」

発行日：2013年10月発行（第42号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ「主の日の災い」エレミヤ

◎証「教会選び」E3

◎お知らせコーナー 「黙示録セミナー」

< 巻頭メッセージ >

「主の日の災い」 by エレミヤ

本日は「主の日の災い」として、このことを見ていきたいと思います。

聖書は、終末に「主の日」と呼ばれる災いの日が到来することを語ります。以下のとおりです。

“1テサロニケ5:2 **主の日は夜中の盗人のように来る**ということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。

5:3 人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。”

主の日とはこの聖書箇所から、見る限り、「突如として、滅びが彼らに襲いかかる」というように、滅びを伴う恐ろしい日の様です。さて、この日に関する我々の疑問は、主の日に滅びるのは、誰か？主の日の裁きは誰を対象にしているのか？ということなのです。

< 主の日は、神の民への災いの日 >

この質問に関連して上記テサロニケの箇所の続きを見ていくと、その裁きは、どうも神の民、新約の神の民を対象に行われるように読めます。たとえば、以下のことばです。

5:4 **しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。**“

ここでは、テサロニケの兄弟たちに対して、パウロは、「あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことは」ないと、約束しています。

しかし、このことばを逆に考えるとその主の日の災いは、暗闇、罪の中にいるクリスチャンに対して、盗人の様に襲うことが予想できるのです。さらにパウロは以下の様にことばを続けます。

“

5:5 **あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。**

5:6 **ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。**

5:7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。

5:8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶるとしてかぶって、慎み深くしていきましょう。

5:9 神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。”

この箇所では、パウロは、「あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。」として、光、真理のうちに歩み、罪から解放された歩みをするクリスチャンたちに関して語っています。そして、それとともに、夜や、暗闇、すなわち、相変わらず罪の中を歩むクリスチャンのことも語っているのです。

そして、罪の闇の中で霊的に眠りこけていくクリスチャンが多いこと、そして、そのような人々を見習わないようにと、「ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。」とパウロは語ります。

そして、そのような罪の闇を歩むクリスチャンと関連してパウロは、「神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく」と語ります。すなわち、主の日の神の怒りとは、そのような夜や闇を歩く、すなわち、相変わらず罪の中を歩み続けるクリスチャンに対して、下されるものであることがわかるのです。

ですから、主の日とは、神の怒りの日であり、その怒りは、闇の子ら、すなわち、相変わらず、罪の中を歩み続けるクリスチャンに対して、燃え上がる、このような主の日に関する大前提を理解しましょう。

<背教と主の日>

さらに、主の日は背教、すなわち、クリスチャンや教会がキリストの教えに背くようになることと関係があります。パウロは以下の様に述べます。

“2テサロニケ2:3 だれにも、どのようにも、だまされないようにしなさい。なぜなら、まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。”

2:4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言します。”

ここで、パウロは、「まず背教が起こり、不法の人、すなわち滅びの子が現われなければ、主の日は来ないからです。」として、主の日と背教、さらに不法の人、すなわち、反キリストとが密接な関係があることを語るのです。そうです、あたかも不潔な部屋とゴキブリが関係するように、これらは密接な関係があるのです。

具体的にいうなら、主の日が教会に到来するその理由は、終末の日におけるクリスチャンの大規模な背教が原因であることをこの箇所は語るのです。さらに、主の日とは、わかりやすくいえば、教会崩壊の日ですが、その崩壊の、主役は反キリストであり、教会内で、神として、君臨する反キリストを通して実行されます。このように、これらは、大いに主の日と関係しています。だから、わざわざ、パウロは、主の日と関連して、「背教と反キリスト」について語ったのです。



パトモスのヨハネ

ですので、聖書は、主の日にに関して今のクリスチャンの理解とまったく正反対のことがらを語っていることを理解しましょう。今の教会は、終末に向かって教会の未来は明るい、艱難の前に教会は栄光の中を挙げられると根拠のない教理を語ります。

しかし、聖書はそのように語らず、終末に向かって教会の背教は進むこと、それゆえに、神の怒りの中で、教会崩壊の日が、反キリスト主導で進むことを語るのです。そして、今の教会の現状は、聖書の語る背教の現状とまさに符合します。たとえば、背教の筆頭教会、カソリックは、ローマ法王が、キリストを信じなくても、その人が良心に従って歩むなら、救われると語ります。とんでもない背教の教理です。そして、キリストのことばに不忠実なプロテスタントはこのような冒険に反対する声のひとつをもあげようとしません。

<ゼパニヤ書の語る主の日>

主の日にに関して旧約聖書にいくつもの記述があります。その中で、ゼパニヤ書から、主の日にに関して学んでいきましょう。この章には、7節に、「神である主の前に静まれ。主の日は近い。」として、主の日にに関して語っています。ですので、この章は主の日に関する章であると理解できます。このゼパニヤ1：2～18の箇所を順に見て主の日について学びましょう。

ゼパニヤ 1:2 わたしは必ず地の面から、すべてのものを取り除く。——主の御告げ。——

1:3 わたしは人と獣を取り除き、空の鳥と海の魚を取り除く。わたしは、悪者どもをつまづかせ、人を地の面から断ち滅ぼす。——主の御告げ。——

上記2節、そして3節にも、「地の面」から絶ち滅ぼすとして、地の面に住む人々に問題があることが語られています。このことに関連して、黙示録にも、「彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行なわず、**地に住む者**

に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」黙示録6：10として、地に住む人に問題があることが書かれています。

地に住むとは、地上の旅人、寄留者であった、アブラハムとは、反対の存在、すなわちこの世の価値観、この世の歩みに染まった人々であり、彼らはその日、神の怒りを受けます。

1:4 わたしの手を、ユダの上に、エルサレムのすべての住民の上に伸ばす。わたしはこの場所から、バアルの残りの者と、偶像に仕える祭司たちの名とを、その祭司たちとともに断ち滅ぼす。

この日、主は旧約の神の民であった、ユダ、エルサレムの住民の上に裁きを下すことを語りました。このことは、西暦70年に成就し、エルサレムの住民はローマにより滅ぼされました。彼らが滅ぼされたその理由は彼らの背教のゆえであり、彼らは多くの預言者を殺し、最後は神の一人子イエス・キリストさえ、十字架で殺しました。

結果、エルサレムは滅ぼされ、神の民は滅ぼされたのです。これは、主の日の成就の一つの形です。さて、主の日は、これで、終わりではなく、教会時代の終わりに再度、主の日があることは、聖書が明言することです。

そして、その終末の主の日に起きることもかつての神の民の背教の再現であり、終末の日に教会は背教し、その結果、主の日が到来し、神の宮である、教会は崩壊し、新約の神の民は裁きに会うのです。

新約の神の民が終末の日に背教し、キリスト殺しが再現することは黙示録が預言することです。

“黙示録 11:8 彼らの死体は、霊的な理解ではソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされる。彼らの主もその都で十字架につけられたのである。”

ここで、書かれている「ソドムやエジプトと呼ばれる大きな都」とは、終末の日の背教の教会であり、ここで、キリスト殺し、すなわち、聖霊への冒瀆が再現することが預言されています。

1:5 また、屋上で天の万象を拝む者ども、また、主に誓いを立てて礼拝しながら、ミルコムに誓いを立てる者ども、

1:6 また、主に従うことをやめ、主を尋ね求めず、主を求めない者どもを断ち滅ぼす。

天の万象を拝むとはたとえが使われた表現です。霊的イスラエルであるクリスチャンの先祖はアブラハムです。そして、アブラハムの子孫は天の星、地の砂にたとえられるので、天の万象とはクリスチャンのことをさします。ですので、天の万象を拝むとは、器崇拜をさす表現なのです。神のことばを投げ捨て、人の器である、ローマ法王や、ビリー・グラハムのことばを優先する人々への神の怒りが描かれているのです。

1:7 神である主の前に静まれ。主の日は近い。主が一頭のほふる獣を備え、主に招かれた者を聖別されたからだ。

一頭の獣とは、終末の日に獣化した教会のことです。教会が終末の日に獣化することは以下の様に預言されています。

黙示録13:11 また、私は見た。もう一匹の獣が地から上って来た。それには小羊のような二本の角があり、竜のようにものを言った。

その日、獣化した教会はさばかれますが、しかし、「主に招かれた者を聖別されたからだ。」というように、聖別されたクリスチャンはその日、祝福を受けます。

1:8 主が獣をほふる日に、わたしは首長たちや王子たち、外国の服をまとったすべての者を罰する。

「外国の服をまとったすべての者」とは、たとえが含まれた表現です。この世や異邦の教え

を取り入れた教会をさすと理解できます。その視点で見ると、今のキリスト教会には、積極的思考、カウンセリング、ヤベツの祈りなど、多くのこの世や、異邦起源の教えがあります。これらは、主の日において、神の怒りをかうものであることを知りましょう。

1:9 その日、わたしは、神殿の敷居によじのぼるすべての者、自分の主人の家を暴虐と欺きで満たす者どもを罰する。

「自分の主人の家を.. 欺きで満たす者」とは、艱難前だの、2段階携挙だの、一度救われたら決してさばかれることはない、などとの聖書にはない、欺きの教えを語る人々のことです。これらの人々は神により、罰せられます。

1:12 その時、わたしは、ともしびをかざして、エルサレムを捜し、そのぶどう酒のかすの上によどんでいて、「主は良いことも、悪いこともしない。」と心の中で言っている者どもを罰する。

「主は良いことも、悪いこともしない。」とは、まさに今の教会のクリスチャンが心の中で語っていることばではないでしょうか。主は背教の教会に対して、恐るべき裁きが下されることを聖書の中で、繰り返して語っていますが、これらの悪いこと、恐るべき事に対して、恐れを持つ人がいません。真剣に考慮する人がいません。しかし、その日は速やかに到来します。

1:13 彼らの財産は略奪され、彼らの家は荒れ果てる。彼らは家を建てても、それに住めず、ぶどう畑を作っても、そのぶどう酒を飲めない。

家は教会のたとえです。その日、神の家、教会は反キリストの支配、横暴の中で、荒れ果てます。神であるキリストは、神の宮、教会の座から追い出され、代わりに反キリストがその座に着きます。以下のことばのとおりです。

“2テサ2:4 彼は、すべて神と呼ばれるもの、また礼拝されるものに反抗し、その上に自分を高く上げ、**神の宮の中に座を設け、自分こそ神であると宣言**します。”

キリストを追い出した教会はもう教会とはいええないものになります。ですので、その日、教会は、黙示録にあるように、「小羊のような2本の角を持つ獣」と呼ばれるのです。

1:14 主の大なる日は近い。それは近く、非常に早く来る。聞け。主の日を。勇士も激しく叫ぶ。

1:15 その日は激しい怒りの日、苦難と苦悩の日、荒廃と滅亡の日、やみと暗黒の日、雲と暗やみの日、

1:16 角笛とときの声の日、城壁のある町々と高い四隅の塔が襲われる日だ。

城壁のある町々とは、キリスト教会の各教団のたとえでしょうか。その日、どの教団も神の怒りの中で、強制的に反キリスト支配の下に置かれます。それは、ソ連や中国の教会が無神論共産主義の下で、迫害に会った日の様なものです。それらの共産主義支配化の教会では、反キリスト的な教理を強制されましたが、同じような強制が背教の教会に行われます。

1:17 わたしは人を苦しめ、人々は盲人のように歩く。彼らは主に罪を犯したからだ。彼らの血はちりのように振りまかれ、彼らのはらわたは糞のようにまき散らされる。

1:18 彼らの銀も、彼らの金も、主の激しい怒りの日に彼らを救い出せない。そのねたみの火で、全土は焼き払われる。主は実に、地に住むすべての者をた

ちまち滅ぼし尽くす。

神のすさまじい怒りが教会へ注がれることが書かれています。ですので、私たちは、終末の日に主の日が到来するその理由を正しく知らなければなりません。それらは、具体的には、獣の国やら、反キリストにより、もたらされるのですが、それらの裏には神の怒りがあることを知らなければならないのです。このことが第一原因なのです。

このように、主の日は背教の教会に対する神のすさまじい怒りの日であることを知しましょう。もちろん、その日、全てのクリスチャンが裁かれたり、神の怒りをかうわけではなく、主の目にかない、恵みを受ける人々もいます。それは、主の初降臨の日を考えれば、理解できます。その日、多くのユダヤ人はキリストを拒絶し、十字架の死に追いやったのですが、正しく、キリストを悟り、永遠の命を得た人々もいます。それは、12弟子を始めとした人々です。終末の日においても、彼らの様にもことばに忠実な人々は大なる恵みを受け、再臨の日に主から誉れを受けることになります。終末における主のみこころを行いましょう。

—以上—



再臨の日

最近、土曜日の集会の時に箴言7章から「教会」の奥義に関しての学びをしました。その中で「教会」と名が付けば、どこでも良いわけではないということを教えていただきました。そのことを通して主が語っていることについて話をしたいと思います。

率直に申し上げると、イエス様の旧約の終わりの時と同様、新約時代の終わりも2種類の教会に区分されます。簡単に言えば、キリストにつく教会と一方キリストを追い出す教会、いわば聖霊の声を無視する教会です。今年の4月号でも同じようなことを話しましたが、つい最近もそういった語りかけを受けましたので、これは大事なことなのでは？と思いましたので、若干重複するかもしれませんが、重ねて話をさせていただきます。「何度も同じことを言うな！聞き飽きたよ！」とおっしゃる方も多いと思います。たしかにこの世の流れはそういった部分があります。ゆえに時として、「くどい」とか「うざい」ということばを耳にします。でも、聖書のみことばであるイエス様の方法はそうではないのです。なぜか？それはズバリ言うと、私自身もそうですが、物分りのあまり良くなかったり、聞いてすぐに忘れるクリスチャンがとても多いからです。「心外な！」と、怒る方も多いかもしれませんが、箴言に「**神と人との前に好意と聡明を得よ**」なんてことが書かれているくらいですので、そのことは事実だと思います。それで単に物分りが悪いとか忘れっぽいだけで終わるならともかく、最悪滅んでしまう可能性があるのも、そういった方法を神様は用いているのです。ゆえに大事なことを、つまり永遠の命から外れてしまう危険性に関してのことは繰り返し、繰り返し何度も語っています。また、パウロも大切なことを繰り返して語っていくことを奨励しています。しかも、「煩わしく思うことなくそうしなさい」とまで言っています。前置きが長くなりましたが、よろしければそういったことを了承&理解の上でお読みいただけたらと思います。

さて、テーマに沿って話をしたいと思います。「教会選び」と言うと、信者になったばかりのクリスチャンには関係があるけれど、もうすでに信仰生活を送っているクリスチャンには全く関係が無いと思われると思います。「〇〇教会の教会員なので、私はずっとそこに属していくつもりです」と多くの方は言われると思います。たしかに終末に入る前までは

それで良かったと思います。でも、今は世の終わりの時代で、今までの常識が通用しない時代です。いわゆる悪を善、善を悪と呼んでいる時代です。また、色々なことは聖書に書かれているように着々と進んでいきます。伝道の書においては、老年の教会は悪くなっていくことがはっきりと書かれています。いわば多くの教会が背信の方向へ向かうということ言われているのです。それが聖書で語られている現実なのです。そのことを信じるか否かは個々の人の判断ではありますが、私個人のことを言わせていただくなら、まさにその通りになっているなあと思います。ゆえに教会選び、いわば教会における吟味はとても大事なことです。

それでは具体的に教会選びのポイントについて話したいと思います。

①聖書のみことばからメッセージが語られていること

今の時代、残念ながら多くの教会が教理や注解書からメッセージが語られています。聞いた話では、カソリックでは教理が統一されているとのこと。また、プロテスタントで盛んに言われている聖書的にならん根拠も無い「**艱難前携挙説**」もそうです。艱難の前に挙げられると、もし、本当にみことばがそう語っているというのなら、この教理ををぜひ証明していただきたいと思います。いずれにしても、みことばを調べずに単に人がそう言っているからと言って、鵜呑みにして語ることは大きな問題です。メッセージを取り次ぐ人はみことばが何を語っているのか？みことばとは矛盾はないか？を祈りによって神様に聞いたり確認していかなければ正しく語ることはできないからです。

②たとえの解き明かしをしていること

このことも再三申し上げてきたと思いますが、聖書には多くのたとえが使われています。みことばに、「**イエスは・・・たとえによらないで話されることはな**

かった」とあります。つまりたとえの解き明かしをすることを聖書では奨励しているのです。にも、拘わらず、たとえの解き明かしをしないというのは神の前に問題です。また、私的解釈をしていないことも大事です。(多くの教会ではⅡペテロの手紙に書かれている「私的解釈」のことを「靈的解釈は良くない」なんていう風にとらえています。これは間違えです。原語の意味合いは「その箇所のみを参照せず、聖書のあちこちの箇所を参照して理解をし、メッセージをする」ことです。)

③終末に関して語っていること

これも何度も繰り返していますように、今は終末の時代です。また、みことばの多くは終末について語っています。ゆえに終末に関して語っていくことは必須だと思われま。逆に終末について全く語らないときに、時代を見分けることができなくなります。ちなみに時代を見分けられない人々に対して、「**偽善者たち**」と主は言われました。(ルカの福音書12:56)ですので今がどのような時代であり終末にこれから何が起きるのかについて理解することは大事なことだと思ひます。

④神の愛や祝福だけでなく、呪いや裁きについてもきちんと語っていること

多くの教会において「神の愛」「祝福」「恵み」こそは強調されますが、神の厳格な裁きや呪いに関してはほとんど耳にしません。それこそ聖書では呪いや裁きに関する記述のほうが断然多いと思うのですが、こういったことに関してメッセージをしないのは問題です。エレミヤ牧師がよく言われていますが、神の愛のみしか言わない、いわば片方の良いことしか言わずにもう反面の災いや悪いことについて言わないメッセージこそ「異端」のメッセージであると言えます。もし、裁きに関して理解しないまま歩んでいくのなら、罪や悔い改め(方向転換)の自覚や実践がないままの歩みに終わってしまうので御国を受け継ぐことは無理だと思ひます。聖書には背信のクリスチャンへの裁きに関してことごとく書かれていますので、万一そういうことに口を閉ざすような教会は要注意です。

⑤聖書のみことばを逸脱していないこと

終末は空想話や嘘、偽りに益々それていく時代です。そして偽教師(間違えた教師や牧師や預言者)がはびこる時代です。たとえば「**艱難前携挙説**」を唱える教師、牧師、メッセンジャーがまさにそうです。艱難時代はある、しかし、その前にクリスチャンは皆天に挙げられる、ゆえに艱難には会わない、だから備える必要もないという教えです。ほとんどの教会が「**艱難のための備えは不要**」とは言わないまでも、そうかと言って、艱難時代に向けての備えについては語っていないと思ひます。しかし、これはNGです。イエス様は艱難時代の備えについて再三語っています。ゆえにある意味このことはみことばを逸脱している、もしくは片落ちのメッセージと言えます。クリスチャンは裁かれずに皆天国とかセカンドチャンスがあるからこの世ではまあまあ、なあなあでも大丈夫、はたまた地獄は無い、カトリックとの合同OK、同性愛容認や福音の総合理解等です。今挙げたことはほんの一例ではありますが、聖書のみことばに書かれていないようなことを語る教会は要注意、いや、論外です。これらはいずれも「**パン種**」(罪)の入った教理です。このようなことを毎週の礼拝の度に聞いていたら、靈的におかしくなっていくま。以前の私もそうだったので偉そうなことは言えませんが、神様の憐れみによって辛うじてそういったところからなんとか脱出することができました。たとえば毎日添加物の入ったものばかりを食べていたらどうなるでしょう？もちろんすぐには、症状は出ませんが、徐々に体がむしばまれていくのではないのでしょうか？あるいは偏った食事ばかりしていたらどうなるでしょう？いつの間にか栄養不足になって、病気にもなりやすくなりますよね。パン種の入ったメッセージや靈的な事柄においても同じようなことを言えるのでは？と思ひます。サタンはずるいので、嘘や偽りをまとめて入れるのではなく、少しずつ少しずつ浸透させていきます。微量ずつなのでなかなか分からないのです。でも、よくみことばと照らし合わせてみるとおかしいことだらけだということに気がきます。あるいは肝心なことが語られていなかったりもします。そう、たとえ少量ずつではあっても変な教理を受け入れ続けていくときに、それが積み重なっていくときに靈的に正しく判断することができなくなったり、みことばとは真逆の方向にずれていたり、靈的に偏ってしま

ったりしますので、メッセージはその都度吟味が必要ですし、みことばと全く違っていると判断したら、そこからは離れていったほうが良いと思います。「いや、大丈夫、たとえ今行っている教会がおかしなことを言っている、個人としてはちゃんとした教理を学ぶから」と言われる方もいらっしゃると思いますが、聖書的な視点で言わせていただくなら、両立は無理だと思えます。なぜならみことばに、「**だれも、ふたりの主人に仕えることはできません。一方を憎んで他方を愛したり、一方を重んじて他方を軽んじたりするからです。**」とあるからです。もし、両立が可能であれば、私自身もそういった道を選択していたと思います。しかし、主の示しは「教会を出なさい」という示しでした。そして、それは私にとって正しい結論をもたらしました。

以上、本日は「教会選び」のポイントに関して思いついた点を述べました。もし、通われている教会が上記の記述においておすすめしている方向とは逆方向に向かわれているようでしたら、キリストを追い出す教会、いわば裁かれる教会に属している可能性があると思えます。その際、吟味&検討が必要かと思えます。すべてが当たっているかどうかは分かりませんが、何となくそのようなことを主が語っているかなあと思いましたので、話をさせていただきました。余計なお世話かもしれませんが・・・お一人一人の判断をどこまでも尊重される神様ですが、良くも悪くも全てのことに結果がついていきますので、ぜひ神様の前に正しい判断をされますようにお祈りしています。いつも大切なことを語ってくださる神様に栄光と誉れがありますように。
—以上—

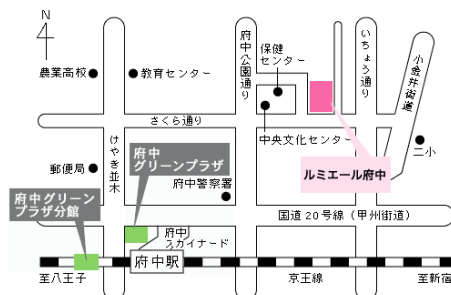
<お知らせコーナー>

● レムナントキリスト教会日曜礼拝：

午前:10:30-12:30, 午後 14:00-16:00

場所：東京、京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館(tel 042-360-3311)

場所の url: http://www.fuchu-cpf.or.jp/green/access/map_02.html



● 第31回黙示録セミナーby エレミヤ

黙示録、ダニエル書等終末に関するトピックを解説するセミナー。

北海道から、広島から熱心なクリスチャンが参加しています。

場所:府中グリーンプラザ本館講習室(7F) 場所は上記。

日時: 2013年11月10日(日)PM6:00-8:30

費用:入場無料、ただしテキスト代 1000円(当日徴収)

定員:20名(先着申し込み順。満員しだい締め切り)

主催:レムナントキリスト教会 (tel 042-306-5002)

申し込み:メールもしくは fax で「名前、住所」記載の上、セミナー参加希望と申し込みください。

Fax 020-4623-5255 e-mail: truth216@nifty.com